

「パンプキン爆弾」が最初に投下された東北・福島市

堀田武弘



今年はいよいよ開催都市を選んだものだと思う。

全国で開催される原爆展にここ数年、ほぼ毎年参加して思う

ことは、原爆展を訪れる人たちのことである。会場で散見する

母親に手を引かれ見入る小学生、父親と一緒に訪れた中学

生、そして高校生等、彼らにはぜひこのような場に足を運んで

欲しいと願う。これらの若者たちには原爆のこと、被爆者のこ

と、反核平和をぜひ継承して欲しい。福島展では私立の女子

高生が続々と会場を訪れていた。彼女達に「なぜ？」と聞く

た。彼女達に「なぜ？」と聞く。「担当の先生が『原爆写真展

展を見て感想文を出しなさい』との宿題を出したから」とい

う答えが返ってきた。宿題のテーマが原爆展でも、生徒達に関

心がなければ会場に足を運ばないのが当たり前だが、福島の

女子高生たちは平和に対する姿勢が立派だと思った。

原爆展での説明は難しい。写真に見入っている人たちの雰囲気

に心掛けていた。会場に必ず展示される十一時二分を指した

柱時計、全国どの会場でも同じだが、この時刻の意味を理解している人は意外と少ない。「十一

時二分とは長崎に原爆が投下された時刻ですよ、広島は資料館では八時十五分を指していま

す。」と説明する。そして長崎の原爆投下は昭和二十年八月九日、広島は八月六日、この日だ

けは覚えていてください」と話しかける。会場を訪れた市民に話を聞いた。小学生の女の子を

連れた母親は、「娘が学校から原爆展のチラシをもらって来た。福島ではこんな展示会がな

いと原爆の実相を知る機会はない。また私にとつても知らない世界、子どもも私も勉強になっ

た。「また、中年男性は「広島、長崎の原爆記念日には黙祷をしている。広島には行ったが長崎

は遠くて…。原爆を知りたい機会でした。」と語った。

また、福島原爆展では会場内に関連する二つのコーナーが設

けられていた。その一つは福島戦災のコーナー、福島市は長崎

原爆と大きな関係がある。それは「パンプキン爆弾」が最初に投下された都市の一つだからである。パンプキン爆弾とは

原爆投下訓練のために米軍が使用した大型爆弾で重さは五トン余り、全体がオレンジ色に塗られていたためパンプキンと呼ばれ、長崎原爆ファットマンと同じ形をした大型爆弾である。太平洋戦争終戦間際に四十九発が全国二十八都市に投下されたが、福島市には七月二十日に投下され十四歳の少年一人が犠牲となった。この

パンプキン爆弾の破片を地元の人が拾い、爆死した少年が眠る菩提寺に保管されている。

長崎市が毎年、全国の非核宣言都市から数ヶ所を選び開催する「県外原爆資料展」、平成二十一年度は東北地方・福島県福島市で七月二十二日から二十七日まで開催された。

終わりに名物の桃の季節となっていたが、長崎と同じく真夏の日差しが照りつけていた。福島市は昭和六十一年に「核兵器廃絶平和都市宣言」を行い、「…我が福島市域においては、いかなる国のいかなる核兵器も配備、貯蔵することはもとより、飛来・通過することを拒み、核兵器の廃絶・軍備縮小と世界の恒久平和の実現を願う」核兵器廃絶平和都市であることをここに宣言する」と謳っている

福島原爆資料展は大成功といえる。私は一昨年の高知展以来、今年で五都市、五回目の参加である。会場はJR福島駅前

に建つ、市役所別館ともいうべき「コラッセ福島」という現代的な建物。場所の良さだけでなく、展示会場の規模、陳列方法

など、これまで参加した中では最も満足できる原爆展となった。またハード面に良かったのは会場に足を運ぶ市民たちの

姿勢で、年齢層の広さ、世代を超えた関心の高さには感服した

超えた関心の高さには感服した

超えた関心の高さには感服した

超えた関心の高さには感服した

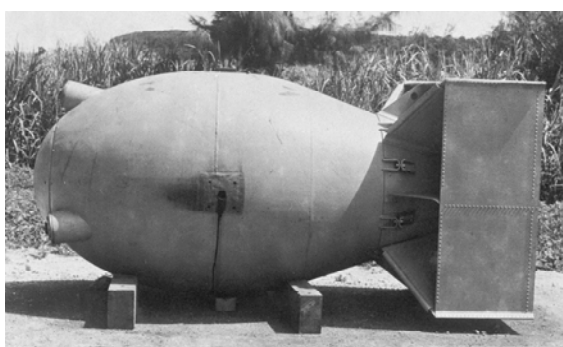




パンプキン爆弾の破片

模擬原爆（パンプキン／1万ポンド爆弾）

パンプキンとは、長崎原爆フアットマンを模した大型の爆弾である。原爆投下を想定した訓練用として使用され、その形と色からパンプキン（かぼちゃ）と呼ばれる。重量約五トン、TNT火薬約二・五トンを使用した。



米軍撮影／工藤洋三（徳山工専教授）提供

(b) 京都、小倉、広島、新潟の四つの都市がこれらの要求を満たしており、そこでそれらが、始めに原子爆弾の標的に指定された。(c) 「パンプキン」(訓練用一萬ポンド破壊爆弾) を使って、これらの原子爆弾投下任務の遂行に際して操縦や目標の確認が容易にできるように、第五〇九戦闘要員にこれらの都市の所在地域を周知させる必要もあつた。そこでパンプキン爆弾で攻撃するための先行爆撃目標が、原子爆弾目標都市の周辺に、ただしそれらの都市は避けて選定された。』とある。(奥住喜重・工藤洋三訳「米軍資料原爆投下の経緯」東方出版) また、一九四四年十二月二十八日、グロウヴス少将の執務室で開かれた会議の席で、当時まだ中佐であつたティベッツは、第五〇九群団の所属機に対しては、隊員の士気と規律を継続するために、月当たり最低三回、大型爆弾の投下をする必要があると発言した。

四十四目標に四十九発(七月中三十七発、八月中十二発)が投下された。原爆展が行われた富山が目標選定された理由として「製鋼所、アルミニウム会社、機械、精密工具の生産を破壊する事により、戦力減退を狙つた」とある。その中のひとつが七月二十日午前八時三十四分に炸裂、自宅近くの田んぼで草取りをしていた十四歳の少年の命を奪つたのである。極めて不十分な概数ではあるが、パンプキンのために四〇〇名を超える死者と、一、二〇〇名を超える負傷者がでたと云われている。

会場に展示されていた。パンプキン爆弾の破片は長さ約五〇センチ、重さ十五キロ、厚さはなんと三センチもある鉄片で、投下地点に直径三十五メートルの穴を開けたという。パンプキン爆弾の実相を初めて知らされた。

もう一つが長崎と縁深い「古関裕而と永井隆」展のコーナーである。古関裕而といえは「長崎の鐘」の作曲者で、地元の人に聞くと郷土の偉人の一人とか。永井隆の写真や、「長崎の鐘」の楽譜等が展示されていた。市内には古関裕而記念館もあり、ここも見学させていたのだが、なじみの曲が館内に流れていた。



望ましいとされた。

第五〇九群団の所属機を最低十五機とみて、各機が月当り三一都二府十五県二十九市町の

最終的にそれらは全て海上投棄とされ、処分された。

「封印」された長崎の記憶

丸田和男



な爆風と熱線、即死を免れた人々は重傷に喘ぎ助けを求めながら防空壕に殺到し、その多くがここで息絶えた。その中には周辺の住民はもとより、近く三菱製鋼所から避難してきた従業員や動員学徒も多く含まれており、まさにこの世の地獄と化したのだった。

戦後この界限の防空壕は多く、時間が過ぎています。

最近ではマスコミを始め多くの方が気軽に訪れる場所ともなっています。部会長をはじめ、この部屋には魅力が沢山!? 部会の写真や人に興味がある方は一度、覗いてみませんか。

部会雑誌

今年の写真資料調査部会は、

一月十八日が初日でした。年末

休みから数えると約一ヶ月ぶり

の再会、ドアを開くとメンバーの

顔と声、いつもの空間がありま

す。この時期特別の予定はな

く、各々が自主的な作業を進

め、時間を過ごしています。

最近ではマスコミを始め多くの方が

気軽に訪れる場所ともなっています。

部会長をはじめ、この部屋には魅力が

沢山!? 部会の写真や人に興味がある方は

一度、覗いてみませんか。



銭座町聖徳寺下から大学附属医院へ通ずる道路沿いの崖には、数多くの横穴式防空壕が掘られていた。この写真も井樋の口近く目覚町にあったそのひとつ。

一九四五年八月九日、午前七時四八分警戒警報発令、続いて午前七時五〇分空襲警報発令となったが、午前八時三〇分には空襲警報は解除になり、市民は防空壕を出て普段の生活に戻っていた。

午前十一時二分、突如天を裂くような閃光、続いて襲った猛烈



三菱兵器茂里町工場一帯の航空写真。上方影に見える崖部分に防空壕があった(米軍撮影)



今月の一枚 (被爆前の大橋)



戦時中の市立長崎商業学校生徒たちの記念撮影(卒業アルバムより)



昭和11年頃撮影(提供: 榎屋修一)



第4号で紹介した大橋橋塔ですが、上部の突起が何か理解できないという声がありました。そこで、現在確認されている被爆前の大橋の写真を二枚ご紹介することにしました。

突起の上に金属製の照明器具が取り付けられているのが確認できます。被爆時は金属供出により取り外されていたと思われる。